

女性では急性冠症候群での胸痛がない場合が多い

胸痛は急性冠症候群（急性心筋梗塞、不安定狭心症を含む疾患群）の代表的な症状で、胸痛をきっかけに急性冠症候群の診断検査が行われることが多い。しかし、診断時に胸痛がない患者の割合は35%に上る。胸痛のない患者では胸痛のある患者と比べて救急部での誤診率が高く、死亡率も高い。また、高齢の急性冠症候群の患者では胸痛がない場合があり、とくに女性に多いことが報告されている。しかし、55歳以下の若い急性冠症候群の患者でも同様の傾向がみられるか否かについては、これまで不明であった。そこで、アメリカ、カナダ、スイスで行われている前向き観察研究の参加者のうち、2009年1月から2012年9月に登録された55歳以下の急性冠症候群による入院患者1,015人（年齢中央値49歳、女性30%）を対象に、急性期の症状について検討した。

その結果、男女ともに約80%が診察時に胸痛を訴えたが、女性では男性に比べて胸痛がない割合が高かった（男性13.7%対女性19.0%）。また、胸痛がない女性では、胸痛がある女性と比べて症状の数が少なかった（3.5対5.8）。この傾向は男性でも認められた（2.2対4.7）。胸痛以外の症状としては、男女ともに脱力感、ほてり、息切れ、冷汗、左腕/左肩の疼痛などが多かったが、胸痛がない男女で比べると女性の方が症状の数が多かった。

したがって、女性では男性に比べて胸痛を伴わない患者の割合が高かった。医療従事者は若い患者、とくに55歳以下の比較的若い女性では胸痛を訴えなくても急性冠症候群の可能性のあることを意識する必要がある。

出典：Journal of American Medical Association Internal Medicine. 2013; 173(20): 1863-1871